

第13回憲法を考える映画の会

ファルージャ イラク戦争日本人質事件…そして

手元資料

- 日時 2014年7月19日(土) 14時～16時半
- 会場 東京体育館第2会議室
- 映画 『ファルージャ イラク戦争日本人質事件…そして』

資料①

映画：『ファルージャ』プレスシートより

- ・映画概要
- ・出演者・監督プロフィール
- ・プロデューサーから
- ・イラク戦争・人質事件年表

資料②

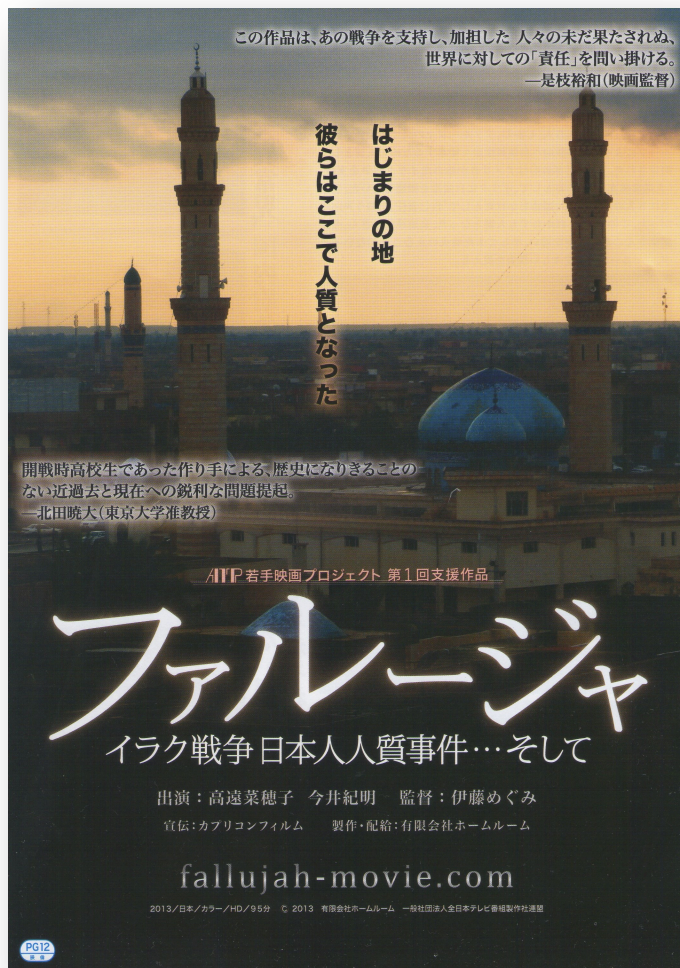
おたより

- ・紀平梯子さんから

資料③

お知らせ

- ・これからの「憲法を考える映画の会」



資料① 映画：『ファルージャ』プレスシートより

2004年4月、3人の日本人がここで人質となった。3日以内に自衛隊を撤退させなければ人質は殺す。

日本政府は撤退を拒否、9日後に解放された3人を待っていたのは、政府関係者、一部のメディア、国民からのバッシングだった。

「人質となったのは彼らの自己責任だ」…その後、彼らはどんなふう生きて来たのだろうか？



映画概要

《テレビでは観られない タブーに挑だ！！》

2004年、イラク戦争「日本人質事件」の当事者の現在を捉えたドキュメンタリー

イラク戦争から10年。当時、日本国内でバッシングが吹き荒れた「日本人質事件」のことを覚えているだろうか？イラク支援のために行った日本人3人。しかし、ファルージャで地元の武装グループによって日本政府へ自衛隊撤退を要求するための人質として拘束された。当時、日本政府はアメリカが始めたイラク戦争を支持。「人道復興支援」のためとして、イラクに自衛隊を派遣していた。日本政府は自衛隊撤退を拒否。日本では3人の行為が国に迷惑をかけたとして「自己責任」を問われ、また同時に事件そのものとは関係のない誹謗、中傷も行われていた。この映画は、はからずも人質となった、高遠菜穂子さん、今井紀明さんの現在の姿を追うことで日本社会の問題点、そして未だ戦火の止むことのないイラク、ファルージャの生々しい現実を捉える。

先天異常児、国内紛争—まだ戦争が終わっていない国イラク…そしてそれぞれのその後



高遠菜穂子さんは、事件後のPTSDを乗り越え再びイラク支援を続けていた。NGOなどの団体に加わるのではなく、1人でイラクに通い支援と調査を行っている。イラクでの先天異常児は戦争以後、今も増え続けているのが実態だ。またファルージャで撮影中にも、現政府と対立する宗派の抗争も発生していた。そこにはまだ平和とは言い難いイラクの現実があった。



一方、人質事件のもう1人、今井紀明さんは5年の間、対人恐怖症に苦しんだ。現在は、大阪で不登校や、ひきこもり経験のある通信制高校の若者を支援するNPOの代表をしているという。社会から拒否された存在に、昔の自分をみて何かできないかと思ったという。それぞれにとってあの戦争、あの事件が引き起こした問題は未だ終わっていない。

資料① 映画：『ファルージャ』プレスシートより

【出演者プロフィール】

高遠菜穂子さん

1970年北海道千歳市出身。大学卒業後、会社勤めなどをしてきたが、30歳を機にタイやインドのマザーテレサの家でボランティアを始める。現在もイラク支援を続け、日本とヨルダンを拠点にし、短期でイラクに滞在しながら個人で医療支援などを行っている。

今井紀明さん

1985年北海道札幌市出身。高校生の頃からフリーライターとして記事を書き、NGOの代表もつとめていた。現在はNPO法人「D×P」の共同代表を務める。通信制高校に通う若者を対象に中退防止のための授業を行っている。

【監督プロフィール】

伊藤めぐみ

1985年三重県出身

2011年4月、テレビ番組制作会社(有)ホームルーム入社

NHK『にっぽん釣りの旅』『アジアで花咲け！なでこたち』でアシスタントとして制作に携わる。



「今回が初めての演出作品です。撮影中、「なぜ私はここまで他人の人生に踏み込むのか」、「私が今この撮影をする意味は何だろう」と考え込んでしまうことが何度もありました。でも高遠さんや今井さんは、それぞれの「今」を見せてくれました。メディアに出ることで再び批判されることを覚悟しながら…

2人を撮影しながらも、この映画を作るということは、私にとってのイラク戦争、そして人質事件で感じた疑問を解くための10年越しの挑戦だったのかもしれない。」

【プロデューサーから】

「自己責任」ってなんですか？

この映画を観てくださる方に私が聞きたいのは、その一言です。

2004年4月、開戦から1年が過ぎたイラク戦争の激戦地ファルージャで人質となった

三人の日本人を苦しめてきたのが「自己責任」という言葉でした。

イラク戦争は2001年に起きたいわゆる9・11事件に逆上したブッシュと米国が反米イスラム勢力への報復として一方的に仕掛けたものでした。それは「大義なき戦争」といわれ国際的に非難を浴び、日本の世論も反対が多数を占めていました。

しかし当時の小泉政権は開戦を支持し、米軍と同盟軍(英国など)の後方支援と現地の

人道支援をするため自衛隊を派遣したのです。

ファルージャのイラク武装勢力が人質解放の条件としたのが、「自衛隊の撤退」でした。

日本政府は即座にその要求を拒否しました。三人の釈放か処刑か、期限が迫る中で、政府関係者から発せられたのが「激戦地へ出かけていった三人の自己責任だ。」という声でした。

それがメディアに採り上げられ、ネットを通じてヘイトスピーチのような悪意に満ちたバッシングとなっていたのです。

三人は彼らを支援するNGOやイラクの宗教指導者の尽力で釈放され帰国しました。

しかし日本で彼らを待ち受けていたのは「国益を損ない世間を騒がせた自己責任をとれ」

という非難の嵐でした。

そして9年後私は映画「ファルージャ」をつくりました。

それはテレビドキュメンタリーの現場で40年間仕事をしてきた私自身への「自己責任」と思ったからです。自己責任とは誰かに問われるものではなく、「私は自分らしく生きているか？」と自らに問うことだと思うのです。

2013年10月 ホームルーム プロデューサー 広瀬涼二

資料① 映画：『ファルージャ』プレスシートより

【イラク戦争・イラク人質事件 年表】

2003年	3月20日	イラク戦争開戦
	4月9日	首都バグダッド陥落
	5月1日	ブッシュ大統領「大規模戦闘 終結宣言」
	12月9日	日本 自衛隊のイラク派遣の基 本計画を閣議決定
2004年	1月	自衛隊本隊派遣
	4月上旬	米軍による一度目のファルー ジャ掃討作戦
	<u>4月7日</u>	イラク人武装勢力がファルー ジャ近郊で日本人3人を拘束
	<u>4月8日</u>	アルジャジーラが武装勢力の 自衛隊撤退を求める声明文を 放送 日本政府は自衛隊の撤退拒否 を表明
	<u>4月10日</u>	武装勢力が3人を解放する趣 旨の声明文を発表
	<u>4月15日</u>	人質3人が解放される
	11月上旬	米軍による二度目のファルー ジャ掃討作戦
2006年	5月20日	イラク正式政府発足(マリキ政 権・シーア派)
	12月30日	サダム・フセイン元大統領 死 刑執行
2009年	2月14日	自衛隊完全撤退
2010年	8月31日	オバマ大統領 戦闘終結宣言
2011年	12月18日	米軍完全撤退

【コメント】

●澤地久枝(作家)

イラクの首都バグダッドから70キロの街ファルージャ。2004年4月、三人の日本人が拘束され、日本国内で「自己責任」を問う声が上がった。イラク攻撃の理由、大量破壊兵器は発見できず、アメリカは撤退する。ファルージャでは二分脊椎など、障害を持った子が生まれ、命は数時間で終る。高遠さんは一人でファルージャへ入り、戦争がまさに今進行している現実を報じようとしている。その勇気に揺さぶられる思いがする。

ファルージャは意識の底で遠くなっているが、あの新生児たちの姿には頭をたれる。生きのびているすべての人間へのメッセージだと思う。

●大澤真幸(社会学者)

あの人質事件によってわれわれは思い知った。われわれ日本人は、〈正義〉についてのあらゆる思想をすでに失っている、と。こう痛感せざるをえなかったのは、「正義」の実現を目ざして失敗した三人に対するバッシングが、もうひとつの「正義」を立ち上げようとする格闘を通じて発せられたわけではなく、主としてルサンチマンの温床から出てきていたからだ。「ファルージャ」には、〈正義〉のこの不毛地帯から脱出しようとする必死の試みが撮られている。成功への保証をもたないそれらの挑戦に、胸が打たれる。

●安田純平(フリージャーナリスト)

自分ではない自分を批判され、期待されていたようで対人恐怖症になった—との今井さんの言葉には身につまされるものがある。やはりイラクで拘束された私も経験した感覚だからだ。人との関わりを通して自らの居場所と役割を見出し、自分を取り戻していく2人の姿を見て、私が今も続けている戦場取材はただおのれのプライドにこだわってきただけのものなのではないか、という気がして少し胸がざわついた。

●鈴木 邦男(一水会顧問)

政府は国民を守らない。イラクで人質になった3人に対し、「自己責任だ」と言って切り捨てた。国を守らない政府など、いらぬ。倒されるべきだ。ところが冷酷な政府を支持するマスコミがいた。愚かな国民もいた。そして、帰国した3人に猛然と襲いかかってきた。「死んだ方がよかった」と。もはや、「殺人国家」だ。国家的な狂気、暴走、ヒステリーは何故起きたのか。カメラは冷静に、真面目に、執念深く、この問題を追いかける。そして告発する。「国家的いじめ」に抵抗できなかった我々一人一人の〈責任〉も問う。考えさせられる映画だ。怖い映画だ。

資料① 映画：『ファルージャ』プレスシートより

【コメント】

●天木直人(元駐レバノン特命全権大使)

米国のイラク攻撃が行なわれてから10年あまりがたち、日本だけがその検証をすることなく忘れ去ろうとしている。

在レバノン特命全権大使の職をかけてイラク戦争に反対した私としては残念でならない。

そんな思いの中で私はこの映画を鑑賞する機会に恵まれた。

これこそがあのイラク戦争を見事に検証した映画だ。作者に感謝したい。そして一人でも多くの国民に観てもらいたい。

●北田暁大(東京大学准教授)

自己責任という怖しく不気味で抑圧的な言葉が言論の場を覆いつくしたあの人質事件から10年。当事者たちがその後向かい合ってきた現実を辿り直すことにより、イラク戦争が、現地の人々にとってはもちろん、元「人質」たちにとっても、そして自己責任論という暴力を生み出し続ける日本の社会にとっても、終わりを迎えていないことが丁寧に描き出される。開戦時高校生であった作り手による、歴史になりきることのない近過去と現在への鋭利な問題提起。

●是枝裕和(映画監督)

あの事件の「自己責任」を問われた人々のその後の人生における「責任」の取り方を追いながら、この作品は、あの戦争を支持し、加担した人々の未だ果たされぬ、世界に対しての「責任」を問い掛ける。

●谷村志穂(作家)

若い監督、伊藤めぐみさんには、迷いが無い。始まりから終わりまで、自分自身の確かな実感がある。世界は平和ではないと実感するのは他人事で、実は一見平和に見えるこの国の中にこそ、たくさんの矢が飛び交っているのだと怖いくらい感じる瞬間を経て、人は本当に世界に出会うのだと思う。

●森達也(作家・映画監督・明治大学教授)

とても重要な作品だ。観ながら思いたす。辛いけれど思いたす。あのときに自己責任を叫んだ人たちは、イラク戦争に対して無関心だった自分でもある。その帰結として現在がある。今も多くの人が苦しんでいる。助けを求めている。全国民に観てほしい。そして思いたしてほしい。考えてほしい。

【コメント】

●鎌仲ひとみ(映画監督)

こんなにも献身的な女性を多くの日本人が誤解し、激しく批判した。こんなにも純粋な青年を歩いているだけで殴る人がいた。ものすごく多くの日本人が中傷に満ちた手紙を送りつけた。そのバッシングはいったいどこからやってきたのか？メディアが作り出したのか、政府が企んだのか、その両方かもしれない。しかし、何よりも2人は人質解放の後に待っていた日本での過酷な現実に向き合い、生き延び、前に進んでいる。イラク戦争から10年。事実をきちんと伝えるこの映画ができ積年の誤解が解けることを心からありがたううれしいと思う。

●サヘル・ローズ(タレント)

今の報道では語られなくなったイラク。いや、当時ですら語られなかった現状。そして人質三名の方々。あのときは確かに私のまわりや、報道のあり方では『自己責任』だとか『本人たちが悪い』ような意志的な誘導を感じた。この、ドキュメンタリーを通して感じた彼等の意思の強さやイラクへの思いは本物だと、遊び心じゃなくて。そして高遠さんを通してみえるアメリカが残した傷跡は痛々しく、癒えるどころか、あとから見えてくる次世代の子供たちへの脅威という刃は鋭く痛々しい。映像は目をそらしたいものばかりですが... 武器... ウラン。このドキュメンタリーは日本だけでなく多くの国々でもみてもらいたい。戦争は白旗をあげたら終わりじゃなくて続いている。批判はかんたん。けれど批判をするまえにあらゆる角度からみてから否定なり批判をするべきだと思いました。

●小野さやか(ドキュメンタリー作家)

「日本人人質事件」と大騒ぎしたあの日、誰もが最良の不完全な選択をした。自己責任の負える範囲で発言をした人、重すぎる責任を負った人、無関心な人。その延長線に、人間が人間を破壊する、オマケのような現実がある。監督・伊藤めぐみさんは、28歳でこの違和感を形にした。

スクリーン越しに対峙したのは、安全な国・日本にいる「私」だ。

資料① 映画：『ファルージャ』プレスシートより

【コメント】

●原一男（映画監督）

作品を見ながら、何度、嗚咽を堪えたことだろう。

ここには、日本人として、いや、「ヒトとしての生き方」の原理が、痛く、鋭く、熱っぽく、示されている。

「イラクは、今も戦場だったー。」アメリカの化学兵器を使用した爆撃による、イラクの先天性異常の赤ん坊たちの映像が挿入されているが、名状しがたい激情に駆られる。絶句するしかない。まさに、ヒトが破壊された状態で、一応、この世に生を受けてくるのだが、生きていく力もなく、まもなく死んでいく。この世の生き地獄のような惨状をみて、この子たちのためになんとかできることをしよう、と、真っ当に考えることができるヒトこそ、真にヒトと呼べるのではないか。「日本が支持した戦争に、今も苦しんでいる。」そのイラクの人々に対して、真っ当なヒトとして支援の活動に励む高遠菜穂子さんが、不運にも人質事件に遭遇、解放されたあと、ニッポン人たちから激しいバッシングを受け、さすがに落ち込んで、死にたい、と口にしたり、高遠さんの母親は、娘の頬をひっぱたいて、何をグジャグジャ言ってるン！早くイラクの人たちの元へ行って働くように、と励ましたという。このインタビューのくだりが、作品の中で最も激しく私の琴線に触れた。湧き出てくる涙をとどめることができなかつた。娘の背中を押す母と、背中を押されて、再び戦場へととって返す娘と、真っ当なヒトとしての凜とした輝きを見た想いだつた。それにしても、この人質事件を巡って寄せられたメッセージの賛否の比率が、批判500通、激励800通であったという事実を、私は始めて知り、驚いたのだが、これを報道したヒトが、批判のみを取り上げたことが原因で、ネット世論の暴走に火をつけ、集団ヒステリックによるパニックとでもいうべき「自己責任を問う」バッシングが熱に浮かされたようにこのクニを襲った。事実を報道するという原理原則を忘れた記者が、その時、何を考え、恣意的な選択をしたのかを知りたい想いに駆られたが、取材拒否をしたのだろうか、映画には登場しない。ともかく、マスコミが煽り、為政者たちが、ここぞとばかり、ヒトとしての良心を潰しにかけ、浅薄なコクミンが踊らされるこのクニに、恐怖すら感じてしまう。いや、そうではないのだ。凄まじいバッシングに打ちひしがれ、PTSDに苦しみながらも、懸命に立ち直り、なお激しくヒトとしての生き方を求め、イラクなど戦場に赴き、苦闘する高遠さん、フィールドこそこのクニに移したが、不登校や引きこもりに苦しむ若者たちを支援しようと活動する今井紀明さんの姿が私たちの魂を揺さぶり、励ましてくれている、と、そのことに想いを馳せるべきなのだろう。

この作品の監督である伊藤めぐみさんについても触れておきたい。

「みんなが反対したら戦争を止められると本気で思っていた。」と高校生のときからイラクの子どものための支援の活動を始めたそうだが、この作品の全編にわたって醸しだしている緊張感は、自らが、ヒトとしていかに生きるべきかと息苦しいまでに問うていく真剣さのエネルギーの息づかいなのである。アメリカが大国エゴイズムむき出しで始めた戦争に追随するわがニッポン国の権力者。彼がイラクに自衛隊を送り込むという選択をしたことを受けて、伊藤さんは、これで、私も戦争に対して責任を負うことになった、というが、この感性こそが、真にヒトであることの証ではないだろうか。

言わずもがなではあるが、ヒトとして生き方を問われているのは、観客である私たちである。汚濁と腐敗の膿と腐臭に充ち満ちたこの国の中で、真に、ヒトの生き方を問う「警世」という表現が値するドキュメンタリーに出会って、勇気を吹き込まれて心底、嬉しく思う。

資料② 映画の中の声明文

【声明文】

我々イスラム教のイラク国民は
あなたたちと友好関係にあり 尊敬もしている
しかし あなたたちはこの友好関係に対し
敵意を返してきた
米軍は 我々の土地を侵略し
子供たちを殺すなど
残酷な行為を行っている
あなたたちはその米軍に協力したのだ
今3人の日本国民が我々の手の中にいる
自衛隊が我々の国から撤退するか
3人を 生きたまま焼き尽くすか
あなたがたは選ばなくてはならない
この映像の放送から
要求を実行するまでに3日間の猶予を与える

2004年4月7日サラヤ アル ムジャヒデン

【声明文】

我々は 日本政府が出した3人の命を
軽んじる生命に対し 強い痛みを覚えた
日本政府は 自国民の命を尊重すらしていない
ならば イラク国民の命を 尊重するのだろうか
……(中略)……

我々は 独自の情報源を通じ
3人の日本人はイラクの人々を助けており
占領国アメリカに
従属していないことを確認した
よって 日本人の立場を考慮し
今後24時間以内に3人を解放する
なお 日本人が政府に対し
イラクにいる自衛隊を撤退するよう
圧力をかけることを求める

2004年4月7日サラヤ アル ムジャヒデン

資料③ おたより

ご心配を、本当に有難うございました。今年は年をとっていろいろなさしさわりが出てきます。戦争の前に、もうひとつ戦争が在るようなものです。

日本が、戦争に巻き込まれる！と言うことは、逃げ場のないおそろしさです。

前戦争の時、私の家に父親のお客さんがみえと、必ず、玄関に刑事の姿があらわれたのです。

朝日新聞につとめていても平和をのぞんで、九州大学を追われた危険な人物だと分かっている、おどかしに来るのです。母親や私にも誰々がお客様に来ているのデスカアア、とさぐりを入れてきます。下手なことを言うと父親を、連れて行かれるおそろしさがあります。父親の真友、中野正剛代議士を追いつめて、自殺させたのも、戦争をするために邪魔だった人物だったからです。それが当たり前になる前に戦争を少しでも遠ざけねばならないと私も思って、共にがんばりたいと祈ります。お身体に気をつけて運動を先にすすめて下さい。紀平悌子

私もみなさま、友人知人さまさまざまな思いを記憶する女性も若く強い意識を持つ男性も本気で運動を続ける人は日を追って強い意志を持って参加してまいります。

色々ご苦労があって、の継続へのご努力を心から支持し、出来る限り共に歩いてまいります。市川先生の夢に描いた平和の志を継続して行きます。よろしく願います。今、熊本も会催をめぐらしているところ。津々浦々を映画(平和)で平和をかちとりましょう。御体お大事に。いつもありがとうございます。ために元気で戻りたいと思っています。ご苦労があると思いますが、出来る限りのエネルギーを結集したいと思っています。紀平悌子

(お手紙にあった中野正剛代議士の自殺について、恥ずかしながら知らなかったのでウィキペディアで見つけたものを転載します。秘密保護法制定など、軍事国家、戦争国家への道をほんとうに歩もうとしているということはこんな社会にしようとしているのかと感じてもっと歴史や先人の歩んだ道とその反省を学ばなければいけないと思います)

中野 正剛(なかの せいごう、1886年(明治19年)2月12日 - 1943年(昭和18年)10月27日)は大正・昭和期のジャーナリスト、政治家。東方会総裁、衆議院議員。号は耕堂。(略)

東條英機への反発

東條英機首相が独裁色を強めるとこれに激しく反発するようになる。1942年(昭和17年)に大政翼賛会を権力強化に反対するために脱会している。同年の翼賛選挙に際しても、自ら非推薦候補を選び、東条首相に反抗した。東方会は候補者46人中、中野のほか、本領信治郎(早大教授)、三田村武夫たち7人だけであった。それでも翼賛政治会に入ることを頑強に拒み、最終的には星野直樹の説得でようやく政治会に入ることを了承した。(略)

中野の反東條の動きはますます高まり、1943年(昭和18年)正月、朝日新聞紙上に「戦時宰相論」を発表し、名指しこそしなかったものの、「難局日本の名宰相は、絶対強くなければならぬ。幸い、日本には尊い皇室がおられるので、多少の無能力な宰相でも務まるようにできているのである」と東條内閣を痛烈に批判した。この記事の内容に東條は激怒し、朝日新聞に対して記事の差し止めを命じた。しかし東條は中野のこの論文が記事になってから読んだのであり、この差し止め命令はまったく意味のないものであった。

同年3月、第81帝国議会で戦時刑事特別法の審査をめぐって、6月、第82帝国議会でも企業整備法案審議をめぐりそれぞれ政府原案に反対した。議会内では鳩山一郎、三木武吉らに呼びかけ、議会で東條内閣に対する批判を展開するが、東條側の切り崩し工作によって両法案反対運動は頓挫する。

議会での反東條の運動に限界を感じた中野は近衛文麿や岡田啓介たち「重臣グループ」と連携をとり、松前重義や三田村武夫らと共に東條内閣の打倒に動きはじめた(松前はこのため報復の懲罰召集を受けてしまう)。こうして中野を中心にして、重臣会議の場に東條を呼び出し、戦局不利を理由に東條を退陣させて宇垣一成を後任首相に立てようとする計画が進行し宇垣の了解も取り付け、東條を重臣会議に呼び出すところまで計画が進行したが、この重臣会議は一部の重臣が腰砕けになってしまい失敗に終わる。

ただし、こうした中野の反東條の動きは、早期和平のための内閣を目指したのではなく、東條に代わる内閣によって戦時体制の立て直しを目指したものであったことに注意を払う必要がある。

逮捕と自殺

そのうち、中野は東久邇宮稔彦王を首班とする内閣の誕生を画策する戦術に目替えたが、東條の側の打つ手は中野の予想以上に早く、まず1943年9月6日、三田村武夫が警視庁に逮捕される。警視庁は10月21日に中野をはじめとする東方同志会(東方会が改称)他3団体の幹部百数十名を検挙した。中野の逮捕は、中野がある青年に「日本はかならず負ける」といったという風説に基づくもので、東條は大いに溜飲を下げたが、この中野の逮捕は強引すぎるものとして世評の反発を買うことになった。友人の徳富蘇峰や鳩山一郎は中野釈放を各方面に主張、東條に呼び出されて中野の起訴を指示された松阪広政検事総長は「こんな証拠ではとても起訴はできない。大体、総理、あなたは中野のことになると感情的になりすぎる」と東條に反論して喧嘩になるありさまだった。検察・警察側としては、中野ほどの大物になると拷問などの強引な取調べは出来なかった。

さらに「起訴が無理で釈放せざるを得ないなら中野の議会出席を停止させよ」と東條に指示された国務相の大塚唯男までもが(大塚は東條のイエスマンとして議会統制をおこなっていた)「そのようなことは憲法上の立法院の独立を侵害しかねないのでできません」と東條に反論して喧嘩になるありさまだった。結局、中野は嫌疑不十分で10月25日に釈放される。その後、東條の直接指令を受けた憲兵隊によって自宅監視状態におかれ、その後の議会欠席を約束させられたという説がある(戸川猪佐武『東條内閣と軍部独裁』講談社)。

そして同年10月27日自宅1階の書斎で割腹自決、隣室には見張りの憲兵2名が休んでいた。自決の理由はいまだに不明で、一説には、徴兵されていた息子の「安全」との交換条件だったとも言われている。また自身がおこなった東久邇宮稔彦王の首相担ぎ出し工作について、東條サイドに調査攻撃されることにより、皇族に害が及ぶことを懸念していたからだという説もある。自刃する直前に中野はムツリニヤヒトラーからもらった額をはずし、机の上に楠木正成の像と『大西郷伝』を置いたと伝えられている。自決の数時間前、四男泰雄に「千里の目を窮めんと欲し更に上る一層の楼」と色紙に書き、憲兵の目の前で渡している。これらのエピソードは、中野が最後には、狂騒的な全体主義思想から完全に離れたことを示しているといえよう。遺書には「俺は日本を見ながら成仏する。悲しんでくださるな」と書き残されていた。

(ウィキペディア)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E9%87%8E%E6%AD%A3%E5%89%9B>

資料③ お知らせ これからの「憲法を考える映画の会」

08月17日(日) 15時～19時 第2回ちいさな映画会(試写会) 東京体育鑑第④会議室

・「憲法を考える映画のリスト」を新聞で紹介いただいたことから、さまざまな「憲法を考える映画」を紹介いただいております。そうした中から試写して上映するものを決めていきたいと思っております。

「10年後の空へ—OKINAWAとフクシマー」(奥石正監督=じんぶん企画)

「未決・沖縄戦」(奥石正監督=じんぶん企画)

「シバサン—安里清信の残照—」(奥石正監督=じんぶん企画)

「辺野古不合意 名護の14年とその未来へ」(奥石正監督=じんぶん企画)

「GOBAKU アメリカは誰と戦っているのか?」(イラクの子どもを救う会)

「ジャーハダ イラク 民衆の戦い」(西谷文和監督=イラクの子どもを救う会)

・また

09月21日(日) 14時～16時半 第14回 憲法を考える映画の会

10月04日(土) 15時～19時 第3回ちいさな映画会(試写会)

11月22日(土) 14時～16時半 第15回 憲法を考える映画の会

資料③ お知らせこれからの「憲法を考える映画の会」

8月17日(日) 15時～19時 第2回ちいさな映画会(試写会)

9月21日(日) 14時～16時半 第14回 憲法を考える映画の会

10月04日(土) 15時～19時 第3回ちいさな映画会(試写会)

11月22日(土) 14時～16時半 第15回 憲法を考える映画の会